

出題のねらい

㊦は、河合隼雄『子どもと学校』からの出題です。心理学者である著者が、父性原理・母性原理という概念を用い、日本の文化と教育について論じています。平易な文章であるからこそ、段落の構成、前後の文脈、設問の要求を正確に理解し、解答することが求められます。

㊧は、平安後期(院政期)の歌論書である『俊頼髓脳』から出題しました。中でも作歌にあたり避けるべき事項である歌病(かへい)を扱う部分から、「後悔の病」を述べる部分から取りました。ただし、第一段落と第二段落の間に、別のエピソードがありますが、これは全文カットしています。本文としては、まず第一段落に基本理念が置かれ、次に具体例、最後にまとめを配しており、趣旨理解はたやすかったことと思います。

設題としてはいずれも基本事項から出題をするか、基本事項を理解していれば正答に辿り着ける問題としました。高等学校の古文を一通り理解できていれば高得点が期待できるものでした。まずは基本を徹底する努力をしてほしいです。

㊦

【解答】(50点)

問一	a 独裁	b 維持	c 鍛	d 優劣	
	e 腕力				(2点×5)
問二	I エ	II イ	III ア	IV ウ	V オ
					(2点×5)
問三	A エ	B ウ	C イ		(2点×3)
問四	父性原理は善と悪とを明確に区別してゆくのにに対し、母性原理は全員が包まれて一体となってゆく				
	(6点)				
問五	ウ				
	(4点)				
問六	欧米に比して、凄まじい孤独感を体験することが少なく、犯罪や非行がきわめて低いこと				
	(6点)				
問七	一長一短				
	(4点)				
問八	イ				
	(4点)				

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。難しい漢字を書けるかどうかではなく、各漢字の意味を正確に理解し、熟語として用いる力が求められます。誤答の一例として、c「鍛」を「錬」や「筋」とするものがありました。

問二 文脈に合う接続詞、副詞を選ぶ、思考力・判断力を測る問題です。IIについて、アも文脈に合致するものの、直前に「しかし」が使われています。同じ語の繰り返しを避けるため、イ「ところが」が適切です。

問三 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力を測る問題で、語彙力が必要です。語彙力は、日頃の読書習慣に大きく左右されます。

問四 本文をよく読み、設問の要求に合致する部分を抜き出す問題で、思考力・判断力が求められます。設問には、「具体例を踏まえて」とあります。父性原理・母性原理の具体例は、傍線部の次の段落に記されており、その次の段落で、「前者は」「後者は」と、具体例を受けた説明がなされています。傍線部②の段落から抜き出す誤答が目立ちました。この段落は、具体例を踏まえた説明とするには不適切で、本文にあるとおり、父性原理・母性原理について「端的に」述べた一段です。

問五 本文で論じられる概念について、別の言葉で言い換えた表現を考える問題で、思考力・判断力が求められます。ウの「調整役」は、本文の「全体のバランス」を簡潔に言い換えた表現で、母性原理に相当します。同じウの「指導者」は、本文にそのまま一致する表現は見られないものの、父性原理に属する「競争」「個の確立」「自分の意見」といった表現が、強いリーダー、「指導者」を想起させます。よって、父性原理と母性原理の関係が逆転している、ウが正答です。

問六 記述問題です。設問の要求を理解し、段落どうしの関係を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問には、「日本における母性原理の長所」とあるため、日本と別の地域を比較して論じた部分を探す必要があります。母性原理の長所は、「そのよい方」として、傍線部の直前の段落に「欧米」と比較して論じられています。日本と欧米、双方を比較した議論ですから、「欧米」への言及がなければ、解答として不完全です。

問七 本文の構成を的確に読み取る、思考力・判断力を測る問題です。空欄の段落は、これまでの議論のまとめに当たるもので、父性原理と母性原理の優劣は論じられない、と結論づけられています。この結論は、すでに本文第二段落に言及されていました。よって、第二段落の「一長一短」が正答だと分かります。

問八 本文全体の議論を正確に把握する、思考力・判断力を測る問題です。ア・ウは、本文で論じられる父性原理・母性原理の係に合致しません。エ「欧米諸国から……学ぶ必要がある」は、本文に見えない主張です。



【解答】(50点)

問一	③ みつぼね	⑤ あまた	(3点×2)	
問二	① ヤ行上二段活用連用形			
	④ ガ行上二段活用連用形		(3点×2)	
問三	⑧ キ	⑨ イ	⑩ エ	(3点×3)
問四	こそ		(3点)	
問五	エ		(3点)	
問六	イ		(3点)	
問七	そのようなすばらしい山吹を持って、どうしてなにもせず通り過ぎるようなことがあるでしょうか。(4点)			
問八	ア		(4点)	
問九	もし大輔がいなければとっさに返事をする事ができず、恥ずかしいことであっただろう。(4点)			
問十	ア		(4点)	
問十一	ウ		(4点)	

【解説】

問一 漢字の読みを問う問題です。どちらも基本的な語句からの選択でしたが、「御局」の正答率が低かったです。

問二 動詞の活用を問う問題で、基本的な出題です。これも正答率が低かったです。誤答を見るに、そもそも古典文法の基礎を理解していないとおぼしいものが散見されました。本学の一般入試(国語)では、古典の出題があることは周知しています。この程度の基本問題は対策をすれば確実に得点できるもので、もう少ししっかりと対策をして試験に臨んでいただきたいと思います。

問三 助動詞の意味を問う問題。⑧は「けむ」で過去推量。⑨は「けり」ですが短連歌の上の句(=和歌)で用いられているので詠嘆です。⑩は「られ」で、「仰せ」と未然形に接続しており、主語が「宮」で敬意の対象となるので、尊敬です。三問とも助動詞の基本的な理解ができていれば正解可能なレベルでした。

問四 空欄補充問題です。同文末が「付けたりけれ」で終わっているところに注目。已然形で文章が終わっ

ているため、空欄には係助詞の「こそ」が入ります。誤答には「色」や「山吹の花」など名詞を補うものが多かったですが、もう少しきちんと文脈を把握する力が求められます。

問五 単語の意味を問う問題。「まうけ」は準備のこと。道信はここを通り過ぎる段階で、声を掛けられることを予想してあらかじめ準備していたのか、という文脈。なお、これは筆者による推量であり、道信が実際に準備していたかどうかは本文中では明確ではありません。

問六 文脈理解を問う問題で、具体的には「しか」の指示内容を聞いています。直前に、貫之が一首につき十日から二十日掛けて詠んでいたとあるから、時間を掛けていること、「折に従ひ、事にぞよる」とあるから、個別の事情を尊重すべきとなります。従って、正答はイです。

問七 指示内容を明確にして現代語訳する問題です。道信が持っていたのは山吹の花であるから「さる」は山吹の花です。「ただに過ぐる」は何もせずそのまま通り過ぎることをいいます。この二点を基準として採点しました。

問八 内容理解を問うが、和歌の表現を理解できたかがポイントとなります。ここでは道信が上三句において山吹を異名の「くちなし」と言いかえたのに対し、口がないことからものも言えないことを想起し、「えもいはぬ」と表現した機知を評価しています。従って、正答はアとなります。

問九 「恥がましかりけること」の理由を明示して現代語訳する、文脈理解と現代語訳の双方を問う問題でしたが、理由のみを解答する答案が複数見られました。まずは設問をよく読み、指示された内容を答えていただきたくおもいます。大輔がいたから道信の短連歌に応じることができた、という内容なので、理由は返事をする事ができずに、となります。加えて、反実仮定の構文であるので、これを採点基準としました。

問十 内容理解を問う問題です。正答はアです。イは伊勢大輔の具体例をいうものであり、和歌の素養と人選びは関係なく、不適。ウも同様に具体例をいうものですが、女性に声を掛けられるために山吹を持っていただけではなく、不適。エは上手ではない人が短時間で詠んで失敗するわけではなく、あくまで個々人の素養によるとしており、不適です。

一般入試／国語(後期)

問十一 文学史問題。源俊頼が編纂した勅撰和歌集は『金葉和歌集』です。これだけであれば比較的難問とされますが、ほかの選択肢は『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』と中学校の国語で学習する歌集としました。すなわち、中学生でも回答可能な設問です。全問通して、基本ができていないとおぼしい答案が多かった印象です。まずは高等学校までの学習を定着させる努力をしてほしいです。

【現代語訳】

歌の八つの病の中に後悔の病という病がある。歌をすばやく詠み出して人にも語り、書き出したりもして、後に、よいことばや字句を思いついて、このように言わないでどうしてと後悔することを言うのだ。そういうことなのでやはり、歌を詠むのには急がないのがよいのだ。昔から、すばやく詠んだものに優れたものはない。だから、貫之などは歌一つに十日から二十日かけて詠んだということだ。そうではあるけれども、時と場合によるはずである。

道信の中将が山吹の花を持って、上の御局というところを通りかかったときに、女房たちがたくさんおりあふれていて、「そのようなすばらしいものを持って、何もせず通り過ぎることがあろうか」と言いかけたところ、はじめから準備していたのであろうか、

山吹のくちなし色に何度も何度も染めたことだ。

と言って、差し入れたので、若い人々はそれを取ることができなかったところ、奥に伊勢大輔が控えていたのに、「あれを取れ」と宮がおっしゃたので、(伊勢大輔が)承知して一間ほどの間をいざり出る間に思いついて、

これはなんともいえない花の色であるよ。

とつけた。これを上がお聞きになって、「大輔がいなかったら、恥がましいことであつたよ」とおっしゃった。

これを思うと、すばやく詠むこともすばらしいことである。すばやく歌を詠んだ人は、かえって長く考えるとおのずと悪く詠むものだ。ゆっくり詠み出す人は、すばやく詠もうとしてもそれはかなわない。ただただ、元来の素養に従って詠み出すのがよいのだ。